

# アフガニスタン文化遺産復興支援に対する 我が国の取り組みについて

山内和也

The Japanese Contribution to the Rehabilitation of the  
Cultural Heritage of Afghanistan

Kazuya YAMAUCHI

2001年3月のバーミヤーン大仏の破壊は衝撃であった。その後、9.11事件を経てターリバーン政権が崩壊し、二十余年続いた戦乱にも一応の終止符が打たれた。アフガニスタンの再建においては、人道的な支援が優先されるのは当然のことであるが、2002年5月27～29日にカーブルで開催されたアフガニスタン文化遺産復興国際セミナーを契機に、文化財保存に関する支援も大いに議論されるようになった。

本稿では、この国際セミナーの開催以降、2003年3月現在までの我が国のアフガニスタン文化遺産復興支援に対する取り組みについて時系列的に紹介していくこととする。

**アフガニスタン文化遺産復興国際セミナー (International Seminar on the Rehabilitation of Afghanistan's Cultural Heritage)**

「アフガニスタン文化遺産復興国際セミナー」は、2002年5月27～29日の3日間にわたり、アフガニスタンの首都カーブルのインターベンチナルホテルにおいて、ユネスコとアフガニスタン情報文化省の共催で開催された。この会議にはパリのギメ国立東洋美術館や大英博物館を初めとして、20の国および国際機関から専門家が集まつたが、日本からは平山郁夫（東京芸術大学学長）と山内和也（シルクロード研究所研究員・当時）が参加した。また、この会議には大勢のアフガン人のオブザーバーも参加し、総勢103名の国際会議となった。

この会議の目的はアフガニスタンの有形・無形の文化遺産の保存・復興の重要性とその問題点、そして、優先すべき、具体的で達成可能な活動を明確化することにあった。会議では、各国の研究者や政府の代表者からアフガニスタンの文化遺産の現状報告、これまでに行われている援助や修復・保存活動の報告、今後の支援に関する提案などが行われた。

この会議の議論の的となつたのは、なんといっても破壊されたバーミヤーンの大仏の再建問題であった。平山学長の基調講演に代表されるように、ほとんどの国際専門家は大仏の再建に反対であり、破壊された現状を保存することが必要であるという考えであった。これに対し、主として

アフガン人のオブザーバーからは、大仏の再建をどうにかこの会議で決議して欲しいという強い要望が寄せられた。当初の討議時間では足らず次の日まで持ち越されたが、国際専門家の間では「破壊された大仏を含め、崩壊の危機にあるバーミヤーンの文化遺産の現状の調査とその保存を最優先とし、再建については、将来アフガン人自身によって決定されるべきである」という合意に達した。この大仏の再建を巡ってはすでにさまざまな人たちや企業の思惑があり、今となっては学術的な問題というより、むしろ政治的・経済的な問題になっているかのような印象を受けた。バーミヤーンの文化遺産保存・修復に関しては、この会議の席上で日本政府がユネスコに対し70万米ドルの資金を提供することを表明したので、今後はこの資金を用いて、全体的な保存・修復プランの作成とその実施が図られることになった。

これに次いで議題として取り上げられた大きな問題は、カーブル国立博物館の再建と略奪された収蔵品の返還であった。会議に先立ってカーブル国立博物館の見学の機会があったが、これまでいくつのメディアでも報道されているように、2度にわたる略奪と破壊を受けたためにほとんどの収蔵品は略奪されたか、もしくは移送され、ごく一部の収蔵品を除けば、現在は建物が残るのみである。1階部分と外壁の一部はわずかながら修理が行われているが、2階部分に関してはほぼ手つかずのまま残されており、天井の大部分は崩れ落ちたままである。階段の左側に据えつけられていたカニシカ王の石像もターリバーンの手で破壊され、現在はその台座を残すのみである。

カーブル国立博物館に収蔵されていた文化財は略奪や破壊によってその行方が不明なものが多いため、ごく一部は依然として博物館に残されており、また、一部の仏像は現在、情報文化省の倉庫に保管されている。残念ながら、これらの仏像もまた、2001年のターリバーン政権下での仏像破壊の教令のために、ターリバーン兵士によって箱から出され、顔の部分を中心に入念に破壊されてしまった。

会議ではカーブル国立博物館の再建についてかなり長い時間が費やされることとなつた。建物そのもの再建についてはギリシア政府がすでに援助の意志を表明しており、討

議の冒頭でもその援助が再確認された。引き続いて、各國・各機関からの援助の表明が行われた。ギメ国立東洋美術館と大英博物館は訓練のための専門家の受け入れを表明し、フランスのアフガニスタン調査・資料研究センター(CEREDA)からは修復機材の提供の申し出があった。流出した文化財に関しては、スイスのアフガン文庫財団(Biblioteca Afghanica Foundation)やいわゆる平山財団(文化財保護振興財団)、アフガニスタン文化財保存協会(SPACH)などによって行われている流出遺物の確保と保管をユネスコが支援するということが確認された。

以下に、重複する部分もあるが各國や各機関から申し出があった援助と支援について列挙しておくこととする。

#### 1. カーブル国立博物館

- ・ギリシア政府は、博物館の建物再建に対して20万米ドルを提供する。
  - ・イタリア政府は、ガズニ博物館所蔵品およびカーブル国立博物館所蔵ガズニ出土遺物の調査のために専門家を派遣する。ローマのアフリカ・オリエント研究所(ISIAO)はアフガニスタンにおいてイタリア調査団が行った調査の出土品のリストを提供する。
  - ・CEREDAは、カーブル国立博物館から提出されたリストに基づいて、遺物の保存・修復に必要な機材・資材を提供する。
  - ・ユネスコは、国外に流出した文化財の保存・保護を支援する。
  - ・ギメ国立東洋美術館と大英博物館は、学術的な文献の再収集、およびカーブル国立博物館の収蔵品目録の作成に協力する。
  - ・SPACHはこれまでに作成したカーブル国立博物館の収蔵品目録を提供する。
  - ・大英博物館およびギメ国立東洋美術館は、博物館等の分野における研修のためにアフガン人専門家を受け入れる奨学金を提供する。
2. 日本政府はユネスコのプロジェクト案の第11項にあるバーミヤーンの保存・修復事業に対して70万米ドルを提供する。このユネスコのプロジェクト案は会議に先立って関係機関に配布されたもので、緊急支援を必要とする文化遺産の案件が列挙されている。
3. ドイツ政府は、歴史的建造物と遺跡の保存・修復のために、ドイツICOMOSに対し、36万5千ユーロを提供する。
4. ドイツ政府は、考古学研究所とカーブル大学の考古学科の再建のために、ドイツ考古学研究所に対して、35万ユーロを提供する。
5. アガ・ハーン文化財団(Aga Khan Trust for Culture)は、バーブル庭園の再建、歴史的街並みの保存のために

500万米ドルを提供する。

会議ではこうした援助や協力の表明の他にアフガニスタンの文化財の現状報告も行われた。以下に主なものを挙げておく。

- ・タルジ(ストラスブル大学教授)によって遺跡の現状報告と流出文化財の報告が行われた。主にトッラ・タパ(ティッラ・テパ)、タペ・ショトルに関するものである。トッラ・タパについてはサリアニディーの発掘した遺物に関しては行方不明であり、また、第7号墓が盗掘を受けている点、また、タペ・ショトルでは盗掘されたものが、日本や欧米の個人コレクションに収まっているという点が報告された。
  - ・アンドレ・ブルーノ(ユネスコアドバイザー)からは、道路建設および基礎部分の盗掘のために倒壊の危機にあるジャムのミナレットについての報告がなされた。
- 会議の最後にあたって、今後の文化遺産復興援助については、国際調整委員会を設置して調整を行うことが採択されている。

なお、この国際セミナーにおける討議内容に関しては、ユネスコより「International Seminar on the Rehabilitation of Afghanistan's Cultural Heritage, organized by UNESCO & the Ministry of Information & Culture of Afghanistan, Kabul, 27-29 May 2002, Hotel Intercontinental, Conclusions and Recommendations」として公表されている。

この項の最後として、会議に参加しての感想を簡単に記しておくこととする。ヨーロッパの主要国はすでにアフガニスタンの文化遺産に関する研究体制、支援体制を準備しており、実際に活動を行っている。それに比べ、日本側はまだその体制が皆無であり、大きく出遅れている状況が痛切に感じられた。ヨーロッパの場合には、大学単位で支援・研究体制を整えているというのではなく、研究所単位もしくは新たな組織の設立によって対応している。博物館や考古学研究所との協力関係に関しても、主要な拠点はすでに押さえられているという状況である。また、各機関は、政府機関ではなくNGOとの連携、活用することによって、厳しい状況の中でアフガニスタンにおける実際の活動を行っている点も注目される。こうした出遅れた状況の中で日本がどういう体制で研究、復興支援に参加していくかを考えていく必要があろう。

#### 「アフガニスタン悠久の歴史展」

2002年7月16日～9月16日、東京芸術大学大学美術館にて東京芸術大学およびユネスコ他の主催で開催された展覧会である。アフガニスタンの歴史と文化財の復興支援のた

めに企画された展覧会で、フランス・パリのギメ国立東洋美術館の所蔵品を中心とした177点の作品が展示された。もともとは、この展覧会はパルセロナ・カイシャ財団、フランス・ギメ国立東洋美術館、フランス国立美術館連合により企画されたもので、スペイン・バルセロナおよびフランス・パリの開催を経て日本・東京へ巡回されたものである。

これとあわせて、東京展の特別出品として、日本に流入しているアフガニスタンの文化財75点が展示された。これらの文化財は平山郁夫・東京芸術大学学長が提唱している「文化財難民」保護運動の一環として収集されたもので、最終的にはアフガニスタンへ返還される予定である。主なものとしてはアイ・ハヌム出土の「ゼウス神像の左足」、ショトラク出土の「カーシャパ兄弟の仏礼拝図」、バーミヤーンやフォラディー石窟壁画の断片などが挙げられる。

この展覧会の図録として次の2冊が刊行されている。

前田たつひこ監修 2002 『アフガニスタン文化財復興支援 アフガニスタン 悠久の歴史展』東京芸術大学、NHK、NHKプロモーション編集・発行

前田たつひこ監修 2002 『アフガニスタン文化財復興支援 アフガニスタン 悠久の歴史展 特別出品カタログ [東京展]』東京芸術大学、NHK、NHKプロモーション編集・発行

#### 「アフガニスタンの文化—東西文化交流と仏教文化」

これは2002年7月29日、前述の「アフガニスタン—悠久の歴史展」にあわせて東京芸術大学奏楽堂で開催された国際シンポジウムである。このシンポジウムは「アフガニスタンを救え」キャンペーンの一環であり、来賓として遠山敦子・文部科学大臣、セイエド・マクドゥム・ラヒーン・アフガニスタン情報文化大臣らが出席した。この席上、「ジャムのミナレット」のユネスコ世界文化遺産への認定書が松浦晃一郎・ユネスコ事務局長からラヒーン・アフガニスタン情報文化大臣へ手渡された。

シンポジウムは3つのセッションからなり、それぞれの構成は以下の通りである。

##### ・第1セッション：基調講演

平山郁夫（東京芸術大学学長）

松浦晃一郎（ユネスコ事務局長）

ジャンニ・フランソワ・ジャリージュ（ギメ国立東洋美術館館長）

##### ・第2セッション：「東西文化交流とアフガニスタンの仏教文化の展開」と題しての発表。

コーディネーター：前田耕作（和光大学教授）

ポール・ベルナール（フランス学士院会員）

「アフガニスタンにおけるギリシア文化」

ゼマルヤライ・タルジ（ストラスブール大学教授）

##### 「アフガニスタンのガンダーラ仏教美術」

宮治昭（名古屋大学教授）

##### 「バーミヤーンの仏教美術」

田辺勝美（中央大学教授）

##### 「玄奘三蔵とバーミヤーンの東大仏」

##### ・第3セッション：パネルディスカッション

前田耕作（和光大学教授）がコーディネーターをつとめ、第2セッションの発表者4名に加え、ピエール・カンボン（ギメ国立東洋美術館主任学芸員）、土谷遥子（元上智大学教授）が参加した。

このシンポジウムに関しては以下の冊子が出版されている。

東京芸術大学・ユネスコ他 2002 『国際文化遺産年記念 アフガニスタンの文化：東西文化交流と仏教文化』

また、田辺勝美の発表については、田辺勝美 2001/2 「バーミヤーン東大仏の製作年代に関する一考察—玄奘さん、見てきたような嘘をいい—」『古代オリエント博物館紀要』22：63-104を参照のこと。

#### 「アフガニスタン文化遺産研究・保存協議会」の設立

前述の通り、2002年5月末にカーブルにおいて開催された「アフガニスタン文化遺産復興国際セミナー」では、ドイツを始めとするヨーロッパの各国の研究者から、内戦中にすでに行われていた破壊された文化遺産の現状調査の報告、そして、その保存・修復に関する具体的なプログラムの提案が行われ、今後の協力体制の整備がすでに進行中であることが明らかにされた。これに対して、日本ではまだこうした体制の準備が皆無で、他の欧米諸国と比べて大きく出遅れていることから、日本においても文化遺産の保存・修復、調査・研究の広い分野にわたる協力体制を早急に作り上げ、アフガニスタンにおいて実際に活動できる準備を整えることが必要であることが痛感された。そのため、アフガニスタンの文化遺産復興支援に深く関心を寄せる研究者が集い、具体的なプログラムを策定し、関係機関と折衝しうる協議会を早急に発足させるべく「アフガニスタン文化遺産研究・保存協議会」の設立が企画された。

7月10日の協議会設立準備事務局の呼びかけに対して、29名の研究者から賛同が得られ、8月1日現在で暫定的な名簿が作成されている。今後は、この名簿を核として協議会の正式発足、そしてより広い分野にわたる賛同者の参加を募っていくこととなっている。

#### 東京芸術大学による「アフガニスタン文化遺産の現状把握と文化財保存修復計画の策定」ための調査団派遣

2002年8月5日～8月11日、平山郁夫（東京芸術大学学長）と山内和也（シルクロード研究所研究員・当時）がバー

ミヤン（平山郁夫のみ）およびカーブルを訪問し、今後の文化財保存・修復・保護分野における協力体制を作り上げるために関係機関と協議をおこなった。

ラヒーン・アフガニスタン情報文化大臣より考古学発掘技術者の育成と訓練、遺跡の発掘調査、カーブル国立博物館よりは写真記録部門再開のための機材の提供と技術者の育成、遺物の修復に必要な工具と化学薬品の提供、フェローズィー考古学センター所長よりは日本との共同調査および考古学者・発掘技術者の訓練と育成に対する協力の要請があった。

### アフガニスタン等文化財国際協力会議

この文化庁主催の会議は、今後の文化財の分野における日本のアフガニスタンへの協力体制を検討することを目的としたもので、14名の有識者で構成されている。2002年9月25日に第1回目の会合が開催された。座長は平山郁夫（東京芸術大学学長）、副座長は渡邊明義（独立行政法人文化財研究所理事長）である。2003年3月時点で3回開催されている。

会議では、主に調査研究、人材育成、資材協力、保存・修復等に関する協力体制についての検討が行われている。また、後述するように、この会議の設置を受けて2002年10月に文化庁によって渡邊明義（独立行政法人文化財研究所理事長）を団長とする調査団が派遣されることとなった。

なお、この会議は名称に「アフガニスタン等」というように、必ずしもアフガニスタンに限定したものではなく、その周辺地域も視野に入れていることを指摘しておく。

### アフガニスタン・バーミヤン遺跡に対する日・ユネスコ合同ミッション

日本国政府がユネスコに対して供出している「ユネスコ文化遺産保存日本信託基金」によるバーミヤン遺跡の保存・修復計画の策定のために派遣された調査団で、5月末の「アフガニスタン文化遺産復興国際セミナー」において表明されたバーミヤン遺跡の保存・修復事業に対する日本国政府の資金提供に関連したものである。バーミヤンでの現地調査は9月30日～10月5日に行われ、ユネスコ国際専門家としては、日本から前田耕作（和光大学教授）、宮治昭（名古屋大学教授）、山内和也（シルクロード研究所研究員・当時）、イタリアからはクラウディオ・マルゴッティーニ（モデナ大学教授）が参加した。また、あわせてマイケル・ペツェット（世界ICOMOS総裁）が参加した。

調査団の目的は、破壊された石仏のあった石窟の壁面等の現状調査と保存方法についての検討、残存する壁画の調査および保存についての計画案策定、現地調査を踏まえたユネスコ提案のバーミヤン保存計画案の修正版の作成で

あった。

限られた期間であったが、調査はバーミヤン谷、フォラディー谷、カクラク谷全般にわたるものであった。調査の結果、国際専門家の間で確認、提案された点は以下の通りである。

1. 大仏窟に関しては、2002年3月のターリバーン政権による爆破の結果、東大仏窟、西大仏窟とともに、これまで存在していた崖・壁面の亀裂が広がったのみならず、新たな亀裂が生じている。とくに、東大仏窟の東側の亀裂は崖の崩壊につながる危険性をもっているため、早急に補強措置を施す必要性があり、保存・修復作業全体の中でもとくに優先度が高い。また、壁画が残されている石窟に関しても崩壊の危険があるものが数多く見られたことから、これらの石窟についても同じように補強措置を行うことが必要である。

2. 壁画に関しては、ソ連邦のアフガニスタン侵攻以前に確認されていた壁画の少なくとも約80パーセントが失われたことが明らかとなった。また、東西の大仏窟の壁面を飾っていた壁画に関しては完全に失われてしまった。これはターリバーン政権下における破壊のみならず、おそらくターリバーン政権崩壊後の盗掘によるものと思われるものも多数存在している。わずかに残された壁画に関しても残存状態が非常に悪く、剥落の危険にさらされているものが多く見られた。また、破壊や盗掘を受けた際の断片が石窟の床面状に多数残されていることが確認された。そのため、応急的な措置として、まず石窟そのもの、もしくは石窟への出入り口を塞ぎ、人の出入りを妨げる必要がある。また、あわせて、石窟の閉鎖に先立って、床面状に散乱している壁画の断片を収集して然るべき場所に保存することが必要である。残された壁画そのものの修復・保存に関しては、石窟を閉鎖している間に適切な方法や技術を検討する。

3. 考古学的調査に関しては、フォラディー谷、カクラク谷を含めたバーミヤン谷全体の遺跡の保存を念頭におき、その遺跡範囲を確定するために谷全体の地形図の作成が必要である。これとあわせて、大仏窟および石窟のある崖面の現状調査や修復作業のために、崖面の立面図の作成も必要である。また、遺跡範囲の確定のための考古学的な分布調査が必要であることが強調された。とくに、バーミヤンには仏教石窟以外にも、一般の人々が利用していたと考えられる石窟が数多く存在することから、今後どこまでを遺跡として認定するかという点が非常に重要となってくる。

こうした国際専門家の提案を踏まえ、現在、ユネスコで保存・修復計画を作成中であり、ユネスコとアフガニスタン政府との間で合意が得られた後、できる限り早い段階で

計画が実施される予定である。

#### 文化庁派遣第1次ミッションによる「アフガニスタン文化財調査団」

2002年10月25日～11月1日、文化庁は、「アフガニスタン等文化財国際協力会議」における討議を踏まえ、渡邊明義（独立行政法人文化財研究所理事長）を団長とする調査団を派遣した。アフガニスタンの文化財保存・修復についてできる限り速やかに計画的、継続的かつ組織的な支援を開いていくための現地調査を行うことが目的であった。

主な訪問先および協議先はラヒーン・アフガニスタン情報文化大臣、カーブル国立博物館、ナショナルギャラリー、国立公文書館、歴史遺産局、考古学センターなどである。各訪問先では一様に人材育成に関する協力、機材の提供に対する強い要望が寄せられた。

#### バーミヤン遺跡保存に関する専門家会合（Expert Working Group on the Preservation of the Bamiyan Site）

11月21日、22日、ミュンヘンにてユネスコとICOMOSの共催で「バーミヤン遺跡保存に関する専門家会合」が開催された。国際専門家やユネスコ担当官など27名が参加し、日本からは前田耕作（和光大学教授）、山内和也（シルクロード研究所研究員・当時）、金子真理（外務省文化交流部国際文化協力室）が参加した。こうした専門家会議は、本来であれば5月末の「アフガニスタン文化遺産復興国際セミナー」で提案された「国際調整委員会」の設置の後に開催されるべきものであるが、バーミヤン遺跡の修復の緊急性および国際社会の関心の高さに鑑みて、急遽開かれたものである。

会議の主な議題は、崖と仏龕の固定、壁画の保存、大仏の破片の保存とアナステローシス（並べ直し）、考古学的調査、記念物と遺跡のリストの提供、バーミヤン遺跡の保全に関する提言の作成であった。各議題について活発な議論がなされたが、大きな問題となったのは、崖と仏龕の固定の方法、そして、アナステローシスであった。

崖と仏龕の固定の方法については、マルゴッティーニ（モデナ大学教授）が行った9月末から10月初めにかけて派遣された日・ユネスコ合同調査ミッションの調査結果をたたき台として議論がなされたが、この調査団以前にバーミヤンで調査を行ったICOMOS調査団の調査結果との間で意見の相違がみられた。主たる相違点は、マルゴッティーニがボルトもしくはアンカーによる崖の固定と補強を提案したのに対し、ICOMOS調査団側は接着剤等を用いての方法が望ましいとした点であった。結局、最終的な意見の一一致はみられず、今後の検討材料として残された。

アナステローシスに関しては、大仏再建とも密接に関連

する問題であることから、その賛否も含めてさまざまな意見が出された。最終的に意見が一致したのは、大仏再建を前提とするのではなく、崖と仏龕の固定・補強作業のために、東西の大仏龕の床に堆積している崩壊した大仏の破片をいったん然るべき場所に移動させて、並べ直してみるということは容認できるというものであった。

この会合は、バーミヤン、なかんずく大仏再建に対する国際社会の関心の高さを示すものであった。今後は、ユネスコの保存・修復作業計画に基づいて、まず緊急性の高いものから実際の作業を開始することとなるが、その間、大仏再建問題、発掘調査も含めてバーミヤン全体のより詳細な保存計画を策定していく必要があろう。

この会合の内容はユネスコより「Expert Working Group on the Preservation of the Bamiyan Site, Munich, 21-22 November 2002, Recommendations」として公表されている。

#### アフガニスタン等文化遺産保存修復協力事業・文化庁派遣第2次ミッション

2003年1月24日～31日、文化庁の委託を受けて、東京文化財研究所からカーブルに派遣されたミッションで、青木繁夫（修復技術部長）、稻葉信子（国際文化財保存修復協力センター保存計画研究室長・当時）が参加した。主たる目的は写真撮影技術・画像処理技術について技術指導を行うことにより、それに必要な写真機材をカーブル国立博物館へ供与した。

#### 東京芸術大学文化支援調査団

2003年2月14日～21日に派遣された東京芸術大学の調査団で、団長は宮田亮平（東京芸術大学美術学部長）であった。目的は「アフガニスタン文化遺産の現状把握」に関する調査で、あわせて、かねてより要請があったカーブル国立博物館の写真記録部門の再興への協力であった。残念ながら、悪天候のためにカーブル訪問は見送らざるを得なかったが、東京芸術大学としては再度ミッションを派遣して文化財の分野におけるアフガニスタンとの協力関係を作り上げていく予定である。

#### バーミヤン遺跡保存事業タスクフォース

これは外務省文化交流部国際文化協力室が主催している非公式な会合である。ユネスコ文化遺産保存日本信託基金によるバーミヤン遺跡保存・修復事業を実施するにあたり、種々の技術的課題が生ずることが予想されていることから、これらの課題に対し官民の専門家の知見を活用して迅速に対処する必要があるため、開催されているものである。2003年1月22日に第1回会合が行われた。2003年3月

時点で2回開催されている。

この会合では、日・ユネスコ合同ミッションで作成されたバーミヤーン遺跡の保存・修復保存計画の検討が行われている。

#### アジア太平洋文化遺産保護研修

文化庁の委託により、ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所の奈良事務所がアフガニスタンの文化財保存修復技術者を招聘したもので、関係機関と協力しながら、我が国の文化財保存・修復技術について研修を行うとともに、アフガニスタン文化財の現状について意見交換を行うことが目的である。2003年3月7日～18日、カーブル国立博物館の修復部門のサイファイ・シラズッディン氏が訪日した。

#### 第13回国際文化財保存修復研究会および「アフガニスタン等文化財保存修復専門家会議」

第13回国際文化財保存修復研究会は、2003年3月13日、東京文化財研究所にて同研究所の国際文化財保存修復協力センターの主催で行われた研究会である。今回の研究会はその副題「アフガニスタンの文化遺産の復興をめざして」が示す通り、アフガニスタンの文化財保存に関する問題を取り上げられた。この研究会には、文化庁の人物招聘事業で訪日したアフガニスタンのアブドゥルワーセ・フェローズィー Abdul-Wasey Ferozi・アフガニスタン国立考古学センター長とアブドゥルーアハド・アッバースィー Abdul-Ahad Abbasy・アフガニスタン情報文化省歴史的記念物保存修復局長が参加した。

研究会における発表題目は以下の通りである。

渡邊明義（東京文化財研究所所長）

「アフガニスタンの現状報告」

アブドゥルワーセ・フェローズィー

「アフガニスタンの考古遺跡の保存の現状と今後の課題」

アブドゥルーアハド・アッバースィー

「アフガニスタンの歴史的建造物の保存の現状と今後の課題」

前田耕作（和光大学教授）

「バーミヤン遺跡の保存の現状とその保存に向けての対策」

明くる14日には「アフガニスタン等文化財保存修復専門家会議」が開催され、前述の2名のアフガン人専門家とアフガニスタンおよび関係する文化財保存・修復の日本側専門家との間で意見交換が行われた。主にバーミヤン遺跡の保存・修復問題、人的育成、機材供与、発掘調査協力などについて話し合いがもたらされた。

本稿では2003年3月時点における我が国のアフガニスタン文化遺産復興支援に関する取り組みについて、可能な限り網羅するよう努力したつもりである。もしも、抜け落ちているものがあれば、ご容赦願いたい。また、諸外国の援助状況や活動状況については本稿ではありません取り挙げなかったが、これについては、稿を改めて紹介する予定である。

アフガニスタンの文化遺産復興に関する取り組みは始まったばかりであるが、2003年の春以降にはバーミヤンにおける保存・修復作業が開始される予定である。こうした戦乱の被害を受けた国の文化遺産の分野における協力は、決してアフガニスタンに限ったことではない。これを一つのモデルケースとして、これからのが我が国の文化遺産復興への協力体制や取り組み方を考えていく必要がある。

山内和也  
シルクロード研究所  
Kazuya YAMAUCHI  
The Institute of Silk Road Studies